

University of the Ryukyus Library Bulletin Vol.27 No.1 Suppl.(No.101) January 1994

〔資料紹介〕

琉球大学附属図書館伊波普猷文庫蔵

『冊封使渡来之時之覚書』

池宮 正治

本資料は琉球大学附属図書館伊波文庫に所蔵されている卷子本で、表に「冊封使渡来之時之覚書」とある。しかし内容は冊封使を迎えたときの覚書ではなく、ほぼ年中行事のように行われる勅書迎えの儀礼を定めた、いわばマニュアルである。現在知られている資料で勅書迎えについてこれほど詳しく書かれたものはない。それ故勅書迎えの儀礼の全体を知ることの出来る極めて貴重な文献である。成立年代は不明だが、中に先規の例として乾隆五十八（一七九三年、同六十（一七九五）年の年号が出ているので、その後のものであることがわかる。琉球王国は中国を宗主国とする冊封国であった。つまり国産の紅銅や硫黄、錫（白銀）を献上するために、進貢船という船二艘に正使と副使正議大夫らが乗り込み、北風に乗って先ず福州に着き、旅装を整えて北京をさして上り、歳暮に凍てつく北京に到着して、元旦の朝賀の式冊封国の外国の使臣とともに列席し、はるばる持ち運んだ

例の産物を献上する。琉球の使者は琉装の色衣冠（正式な冠と衣装）を着用して朝鮮の使者に次いで、天安門、午門と進み、太和門の右（向かって左）の貞度門から入り、東（西班牙の末）太和門より位置して、太和殿前を埋め尽くした華やかで壮大な朝拝の儀式に列席する。鄭章観等の見聞を記録した「琉客談記」によると、その儀式は早朝（戸部良熙の『大島筆記』によると丑の刻、午前二時ごろから入る、とある）、茫洋としてハッキリ見えない時刻から始まり、日が昇って漸く玉座が見える。しかし皇帝の顔は遠いこともあり依然明瞭ではない。その後内宮の乾清宮で親しく皇帝に拝謁、国王の書簡（上表文）を捧げ、皇帝はまた国王の安否を問うのである。そして皇帝の書簡である「勅書」を奉じて進貢使は帰国するのである。那覇港に到着した進貢船は皇帝の名代である冊封使を迎えるように（冊封の時には国王が那覇港まで出向く）、三司官・親方・申口吟味役・正副使、久米村の長史や引札の都通

到着しては対面所の縁側に貢物を積み上げ、内に入って座楽を演奏している。

本資料でもわかるが、国王は唐衣装に着替えて、御庭の浮道（お成り道）の左（向かって右）南殿寄りに、轎倚という交脚の椅子に腰掛け、浮道方向に向かい勅書を載せた龍亭を迎える。龍亭は三台、先頭が勅書、二番目が皇帝から下賜された国王への緞子等の巻物、三番目が王妃へのそれである。これを正殿唐玻豊前の石階のした浮道に据え、その前に香案を設け、その上に正月の天拝や朝賀の時と同様龍蠟燭金花香炉を置いて、国王自ら香を焚いて礼拝する。それにつれて引礼官が「排班、班齊跪、衆官皆跪、叩頭、再叩頭」とか「上香、再上香、三上香」といった朝賀と同じような掛け声が、中国語で歌うように唱えられる。これと似た掛け声は御庭で展開される冊封の儀でも、これに続く天拝でも聞かれる。表題が「冊封使渡来の」と付いたのは勿論後代のことであるが、こうした冊封儀礼との共通項がこれを誤らせたのである。

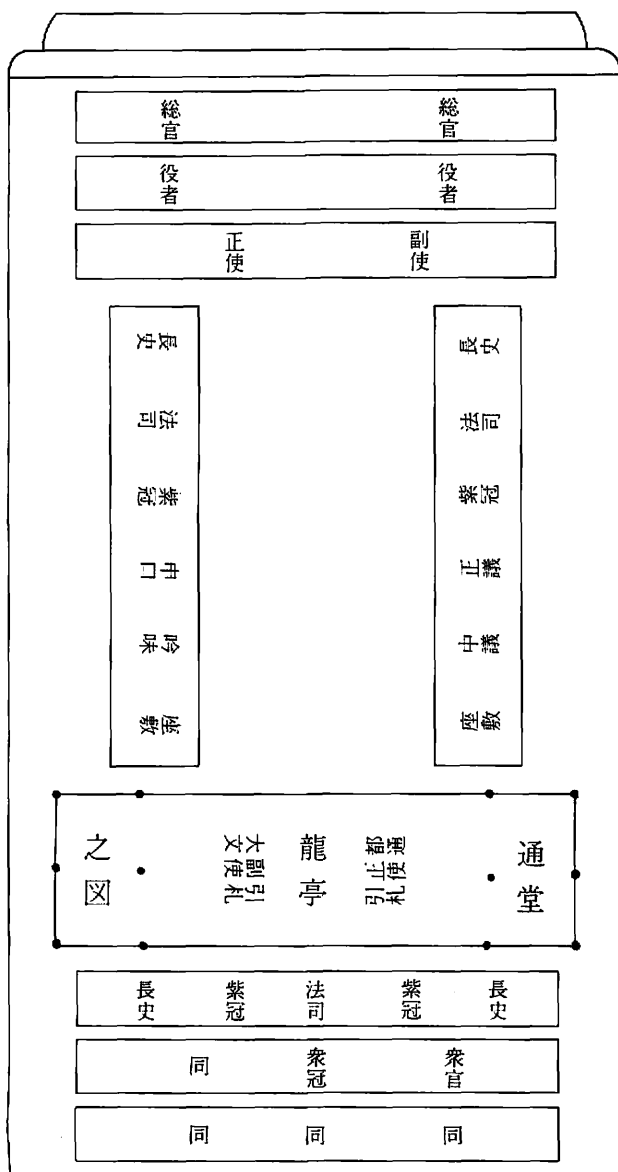
そして龍亭の中の勅書・巻物を下庫理（正殿一階）の御差床（王座）に運び、その後ろの引戸を明けて二階の大庫理へ通じる階段を登って「御内原」へ運ばれるとともに、国王も琉装に着替え、再び下庫理に出御、龍亭を供奉してきた人達の労をねぎらい、酒や菓子、お茶を振る舞う。身分により御差床御拝所、向拝（ごはい）、御庭に着座して「大通り」となる。

その後勅書は国王のプライベートな空間である書院の御床に飾られて、撰政や三司官といった王府の高官に披露され、長史が中国語で読み上げた上で、右筆に渡され保護を命じられる。

本資料の「勅書迎」の内容は概略以上のようである。これとともに、本資料にも指示があるように、王府勢頭方の「図帳」、当方の「図帳」等を参考にして合わせ考えると、いっそ

冊封使渡米之時之覚書

通堂座配之図左記



う「勅書迎」の全容が明瞭になる。

なお本資料は裏打ちしてあり、その裏打ち紙の幅が十八・二寸、内のりつまり本紙が十六寸、長さが六寸六三分、軸はない。

文中括弧（ ）内は本資料にある朱筆による補筆であり、括弧「 」内は墨書による小書で、一種の注である。また虫害欠落等による不明字は□にした。また他に適宜句読点、行替えをしてある。

一 行列引札通事・秀才下知ニ備立、御鎖之側・日帳主取ニ首尾申出候事。
 一中途警固ニ勢頭・筑登之・平等所役人相合、筑佐事ニ下知方相勤させ候事。

一 御船艙屋之内、勅書相読、勢頭・大夫役者中三跪九叩頭之御拜有之。北京大通事、勅書捧、御船より下候時分棒火矢三筒打、三敏仕、通堂崎より引敏金敏旗路次衆、左右ニ相備先立通候。勅書者大通事より竜亭ニ乗上、其左右ニ勢頭大夫相立、竜亭前左右ニ通事式人、秀才式人相立、通事拜唱御拜有之候事。

一 右旁相濟、四ツ頭時分長史方図帳之通相備、通堂打立候事。
 但、崇元寺之前下馬不仕。

一 唐玻豊御戸閉候様下庫理当より御近習ニ申達候事。

付、御規式相濟候得者御戸開候様当より御近習江相達候也。

一 勅書、八幡之前捧来候砌、通事一人早使罷登、下庫理当江相達候得ば、三司官ニ致案内言上有之。此時又奥書院伺公之当より唐御衣裳奉為召候事。

付、唐御衣裳方当暇乞之時、何某相勤候段三司官案内言上仕相勤候也。

一 奉神御門開シ可申通勢頭より三司官ニ致案内開させ候事。

一 勅書下之御庭捧參、御巻物惣様竜亭ニ積上、相濟候得者（供奉之勢頭一同）三司官ニ致案内、下庫理ニ參り、当番之三司官案内、

当御取次言上有之（候得者、則供奉之当一人御座詰之当一人、左右当之座着座仕候事。）

一 右之言上有之刻、当番之三司官以下諸官御轎椅之御後、中頭ニシテ立備候事。

（一当番三司官は真正面階之本、浮道ニ伺公、出御被遊候得者供奉仕ル。）

一 下庫理ニ出御被遊候得者供奉之当四人、御差床之前ニ進、御座詰之当五はい左右ニ下りつくばふ。当番之三司官真正面階之本浮道ニ伺公、供奉仕、御轎椅着御被遊候得者（三司官は御轎椅）御右ニ立、当四人御後ニ相立候事。

（一当番之親方以下筑登之た御轎椅御座右之後中頭にして立備。）

一 御庭出御被遊候段供奉之勢頭・下庫理、下之御庭ニ參、勅書供奉之三司官ニ相達候得者、先備之人数并御飾道具、路次衆人左右之御門より通り御庭備立、執事御道具涼傘、拜唱通事・引札秀才、勢頭大夫・北京大通事・同大筆者・両長史、御備之通竜亭相付、真正面御門ニ入控「御迎御筵ニ立御被遊候は、捧通」。当番之三司官より美御迎可被遊旨言上仕、御轎椅被遊立御「此時三司官当四人供奉、酒庫理大御団羽上候也」、竜亭真正面御門より勢頭大夫・長史・北京大通事・同大筆者□□御品捧来候得ば被遊鞠躬「此時大団羽御後ニ引」、竜亭真正面末之階より三尺程間置、後は百浦添表ニなし、浮道ニ居候者、如本御轎椅ニ着御「此

時大団羽如本捧揚」。則長史老人御轎椅本ニ參り、御左表ニ立備候事。

一 北京大筆者御規式相携候時、其当日足袋はき候也。

一 竜亭供奉之黄御冷傘、御供真正面御門より竜亭浮道ニ居候得者、北表ニ捧候也。

一 竜亭御備之御道具、真正面御門より入、赤御冷傘之本より浮道左右ニ順々立備候也。

一 竜亭供奉人数左右御門より入、南表南風之御殿掛作り角より北ニ向立備、北表はせん袴之角より南ニ向立備、路次衆人は君誇より三番目敷瓦ニ立備、竜亭浮道ニ居、御轎椅御座ニ被遊還御候は、御庭左右各御拜座ニ立備候也。

一 竜亭浮道ニ居候得者、早速御座構之当老人、里之子た老人、花当三人御香台如图御筋仕、通事親雲上式人、御香台左右ニ立、勢頭北京大通事竜亭左、大夫北京大筆者竜亭右ニ立備、其前ニ備後御畳式枚敷、其上赤糸縁御畳老枚、当ニ而黄縫物縁御筵一文字は御焼香台表ニ成、直に留がね差、北表廊下之前退。則三司官より御拜御座ニ着御可被遊与言上仕、三司官・長史・当四人供奉当「此時当番之親方以下筑登之座敷迄御庭左右御拜座江立備」。

御拜御座着御「此時御召御冷傘大御団羽御後ニ引」、唱拜親雲上唱拜被遊（諸官人供奉ニ而）有之候。唱拜左ニ記。

方々相達、当は御茶湯之間を参り、親方・申口本座二而一同二御礼、手を合、座末通筋二而衣冠見繕、親方三番御拜所、申口二番御拜所二而一同二立御拜、親方御差床登御礼、手を合「つくばふ」、其御申口三番御拜所二而一同二立御拜、御差床前少シ北表二寄りつくばふ。当御茶捧参候得者、申口請捧「当控座を退ク」、親方を相渡、親方御丸盆一添而請取、左之手二而拘、御取蓋取、申口捧居候御菓子盆二御茶拜合上

〔此時楽有、御座中何れも手を付〕、御丸盆前二居つくばふ。御天日被下候得者頂キ、御取蓋おそひ、申口を相渡、追付当参り、請取る。親方・申口最前之通御礼、立御礼二而本座を御礼、手を合候事。

右濟而御残り之御茶三司官以下着座之人數を小赤頭宮仕二而被下。入御「楽有ル」。着座人数御礼、手を合候事。

一 諸家来赤頭を勢頭捧二而石ていし階二而御酒被下候事。

一 奉神御門勢頭二而閉させ、三司官を首尾申出候事。

一 御座上可申由当より三司官を案内、退去之事。

一 右御規式相濟、御書院奉行・当、奥御書院を伺公被遊御出座、長史出仕二而御座末着座、勅書丸盆請、御近習捧出御床之口を御筋仕、奉行差寄、勅書御前少シ上二而開候へば、長史差寄読上、相濟、奉行二而如本盆置、長史出仕座御礼、手を合退座候事。

一 進貢御使者於北京從皇帝様上意被成下、致帰国、国王を可相達旨勅諭御座候節は、御書院御拜間被遊候事候間、進貢御使者致帰帆候は、右之次第早速承届兼而達上聞、勅書御拜領物御頂戴□□御庭御規式相濟、引次右之御規式有之候事。

但、御規式の次第は乾隆五十八丑、同六十卯年例式言上写相見得ル。

一、進貢御使者迄上意被成下候節は本文之御次第無御座候也。

一 三司官一人は於御城御迎、兩人は勅書供奉之勤有之候。

一人支有之時は、供奉之勤一人二而相濟候故、足二不及候。兩人支有之砌は、一人之足、三司官座何親方を足被仰付度旨口上言上有之候事。

但、言上相濟首尾方之次第別冊有之。

一 勅書、撰政・三司官を拜見させ可申段、御書院奉行二而達上聞、勅書益載シ奉行捧出、御書院上御座を相飾、下御座を伺公、撰政三司官拜見、長史読之、濟而奉行下之、御右筆格護申渡、首尾言上仕候事。

一 撰政三司官・御物奉行・申口吟味、御書院を参上、奉行御取次、勅書御拜領物御頂被遊候御祝儀申上候事。

一 長史支有之、足何某を被仰付度旨惣役より申出候得ば、御書院当御取次、申口二而及言上、相濟候得ば月番申口より相達候事。

一 御双紙庫（理）支有之時、申口之内何某を足被仰付度旨口上言上仕候事。

一 進貢御使者帰帆仕、早速上国被仰付、乗船以後は勅書御迎之勤、大夫一人二被仰付度旨、覚書言上有之候事。

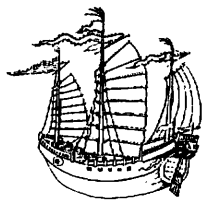
但、言上書調様、月次言上記有之、言上相濟、写首尾方次第、別冊有之。

一 勅書御頂戴之時、例式相替候儀、又は御筆御器物御頂戴之段接貢船帰帆之節は、勅書差上候日、進貢船帰帆之節は、自分より日柄相考、兼而御書院（を）御案内仕、御使者以下船頭総官迄、表向より差上候献上物は、名書月番之申口取次差出、三司官見届、相濟候得者、自分より御書院当御取次、差上候事。

一 聞得大君御殿、佐敷御殿（をも）右御同前二献上候。尤覚書は評上所差出申候。

一 進貢御使者、才府・大筆者、土産物差上候儀、勅書御頂戴不遊内出船被仰付候節は、右御使者を御書翰渡之日差上候。尤台移二而、才府・大筆者御用繁多之砌者、御使者計差上、才府・大筆者は帰帆以後差上候也。

（いけみや まさはる…法文学部教授）



『琉球歴代宝案』

— 『弘文荘待賈古書目』の琉球関係資料 —

榮野川 敦

当館は、開学以来沖繩関係資料を収集しているが、原本資料の所蔵は少ない。数少ない原本資料も特殊文庫にあるのがほとんどである。当館に受け入れられる前の各特殊文庫資料の所在は、戦前に沖繩を離れていったものと先の大戦の戦禍を免れた地域に所蔵されていたものに大別される。

戦前に沖繩を離れた資料うち、戦後、当館をはじめ沖繩の関係機関に戻ったものもあるが、本土や外国の研究機関などに所蔵されていったものも少なくない。

沖繩（琉球）を離れていった資料が、どのような経緯で、どこに所蔵されていったか、といった資料の来歴を調査することはなかなか容易なことではないが、戦前の古書店の販売目録は、わずかではあるが貴重な手がかりを与えてくれる。

『弘文荘待賈古書目』⁽¹⁾（以降『待賈古書目』）はその一つで、戦前戦後を通して有力な古書店であった反町茂雄の経営する「弘文荘」の販売目録である。その『待賈古書目』の第一号から五十号までの『弘文荘待賈古書目総索引』⁽²⁾（以降『総索引』）から琉球関係資料を拾いあげてみると点数にして約三十点、うち戦前発行の『待賈古書目』記載分は十五点と

なっている。

昭和十三年発行の『待賈古書目』第十一号には、次の二点が記載されている。（資料名については『総索引』に記載されているとおりに記す）

琉球官話集 古写本 一冊 三十五円
琉球歴代宝案 写本 二十冊 百八十円

ところでこの『待賈古書目』は、単に書名と価格のみを記載した販売目録ではない。資料一点ごとにそれぞれ長短の解説がつけられていて、資料によっては書影も掲載されているのである。『琉球歴代宝案』については、解説一頁、書影一頁計二頁をさいて紹介されている。その解説に「各冊巻首に「敦厚堂／鄭良弼／珍藏」の朱印あり」という所蔵者情報を伝える記述がある。このことから『琉球歴代宝案』は、現存する歴代宝案の諸本のうちのひとつ鄭良弼本『歴代宝案』であることがわかる。

鄭良弼本『歴代宝案』の来歴については、和田久徳、白石晶子「鄭良弼本（横山重氏所蔵）歴代宝案内内容目録」⁽³⁾に、安里延『日本南方発展史』⁽⁴⁾の記述に拠りながら、「昭和十

四年頃東京の古本屋に出」て、「横山重氏の所有に帰したものと解される」とある。その古本屋が「弘文荘」であった。それを購入したのが横山重であるが、その時の様子を著書『書物搜索』⁽⁵⁾に次のように残している。

今年の五月頃、弘文荘から、目録が来た。いや、目録を発送したという、案内のハガキが来た。で、目録の来るのを、今やおそしと待っていた。目録は翌朝の七時に来た。で、私は、七時半に、弘文荘へ着いていた。

きよしげ 幸若舞の写本か 二十円
姫ゆり 室町物語 写本 三十円

石山問答 古浄瑠璃（二丁欠） 四十五円
琉球宝案 写本 抄本 百八十円

それに、目録に出さないもので、古説経「梵天国」を加えて、合計四百二十三円。私は欲しいものは、全部いただいたという感じであった。

（中略）

弘文荘から帰って、お茶を飲んだりしている中に、ふと気がついた。石山問答で調子に乗っていて、「琉球官話集」（三十五円）を買うのを忘れていたのだ。

「ああこれを忘れていた」
私はすぐ電話をかけてみた。もう売れていた。

「心が伸びないのですね。宝案を買って、その次の頁にある官話集を落としてしまったんですからね」

すると、弘文荘主人は、また言った。
「宝案は大へんですよ。もう三人見えま
した。何さん、何さん、何さん。これから二、
三日、宝案で、言いわけをしなければなり
ません」

「いや、ありがとうございます。宝案は
いい本らしいのですが、これはある先輩に、
買ってもらうことにします。こんな大切な
本を私が所有しては、すまないようですが、
まあお願いします」⁽⁷⁾

さらに横山重は『琉球歴代宝案』について
次のようにのべる。

・・・ 大体、慶長元和以後の写本類で、
いい本というものは、実は少ないのではな
いか。学問的価値という意味では別だが、
どうも字のいい本が少ない。これは絵巻な
どを含めて言っても、同様だ。奈良絵本で
も、いい本は少ない。

そこへ行くと、慶長以前の文字は、大抵
いい。時代がいいのか、人がいいのか、何
か訳があるように思う。あるいは、時代が
古いから、私どもの実感に遠くなって、文
字のいい方だけを見るのか。

そこへ行くと、支那人の文字は、近世の
ものでもいい。前号に書いた「歴代宝案」
(琉球王室文書)は、久米村の支那人の書
いたものだが、いい字だ。支那風の、縦長
の写本で、二十冊ある。あるいは琉球文献

の中で、いちばん古いかもしれぬ。あれが
百八十円では安かった。影写本をつくって
も、そのくらいはかかる。だから、五、六
百円はしてもいい本ではなかったか。今に
なつて弘文荘はそう思っている。

昭和八年に、久米村の天妃廟で、大部の
宝案が、はじめて発見された。これは学界
を驚倒せしめた。それから、この宝案によつ
て、説を立てる人が多くなつた。中には、
宝案を見ずして、中世から近世の、交通史
や、貿易史や、産物史は、論ずることがで
きないと、極言する人もあつた。で、私は、
一年半を要して、古いところを四十何冊か、
影写してもらつた。

ところが、その宝案の一部が、今度、新
しく、支那系統の家から出て来た。私は前
号に書いたような経過をもつて、この本を
買うことができた。これこそ、私の文庫の
いちばんの逸品である。

私は琉球史料をあつめてから、約七年に
なる。私は物語類の方に、専念していたか
ら、しばらく休止していたが、この本を得
て、一般的な意味では、もう峠を越えたと
いう気がした。⁽⁸⁾

『琉球歴代宝案』すなわち、鄭良弼本『歴
代宝案』は、以上の経緯で「弘文荘」から横
山重の所有となり、現在は、法政大学沖縄文
化研究所の赤木文庫に所蔵されている。⁽⁹⁾

註

- (1) 創刊号 昭和八年六月発行
 - (2) 鈴木徳三編『弘文荘待買古書目録索引』
(八木書店 昭和六十三年)
 - (3) 和田久徳、白石晶子「鄭良弼本(横山
重氏所蔵) 歴代宝案内容目録」(『お茶
の水女子大学人文科学紀要』第二十卷
昭和四十二年)
 - (4) 安里延『日本南方発展史』(三省堂昭
和十七年) 五一―五頁
 - (5) 前掲(3) 九三頁
 - (6) 横山重『書物搜索』上下 (角川書店
昭和五十四年)
 - (7) 『書物搜索』上 一八六―一八七頁
初出『三田文学』昭和十三年九月号
 - (8) 『書物搜索』上 一九五頁 初出『三
田文学』昭和十三年十月号
 - (9) 和田久徳『歴代宝案』第一集解説
(沖縄県立図書館史料編集室編『歴代
宝案』校訂本第二冊 一九九二年)
- (え)のかわ あつし・附属図書館参考調査係

琉球大学附属図書館報「びぶりお」
第二七巻第一号(通巻一〇一号)別冊
平成六年一月発行
発行 琉球大学附属図書館
沖縄県中頭郡西原町千原一番地